

昭和五十二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079  
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No.50234

購読料 月額300円 6カ月前納制

くもくじ

■巻頭言■

「反安保」の骨ぬきをはかる『しんろ』…………… 2

◇座談会◇

宮川睦男氏(元三池労組組合長)を偲ぶ…………… 3

(出席者)

向坂逸郎(元九大教授)

塚元敦義(元三池労組書記長)

灰原茂雄(元三池労組書記長)

◇資料と解説◇

「原子力計画はただちに中止せよ」…………… 11

―米・原発事故で社会党が「申し入れ」―

〈資料〉米・原発事故についての「申し入れ」…………… 11

マル生・八万人合理化の嵐に抗して 岩井 章…………… 14

読者からのたより…………… 13

本誌拡大のおねがい…………… 13

■緊急号外・好評発売中■

階級的労働運動の原点 ―不況・赤字攻撃とどうたたかうか

定価 四〇〇円(郵送費含)

# 旬刊 社会通信

NO.52

一九七九年四月二日

一九七九年四月二日

(毎月一日・二日・三日三回発行)

## ■巻頭言■

## 「反安保」の骨ぬきをはかる『しんろ』

われわれは「保守回帰」が一時的現象であり、「自民凋落」の基調に変化のないことを第五一号の巻頭言で述べた。世の中には、新しがり屋で、あわて者が多いものだ。そうした人びとにかぎって、マスコミの報道を根拠とする。一九七七年、社会党から脱落した故江田、田岡氏の言行はその典型だ。

ところが、歴史とは皮肉やだ。超革命的な言辞を弄する者の本質を時の経過とともにあばきだす。それはだれか。『しんろ』という雑誌にたむろする中国に盲従的な人びとである。彼らはまことにのんきである。彼らの方針は中国からやってくるからである。

彼らの主張はこうである。

「最近、世界の大勢に逆行して、ソ連との関係を強めている共産党が、入口で安保廃棄にこだわるならば、社会党はちゅうちょなく、同党と手を切り他の中道派を引きつけて、八〇年代の革新戦線の再生をめざすべきであろう」（『しんろ』七九年三月号、六頁）。

さらにこうもいっている。

「社会党は、昨年四月『革新の大義』という飛鳥田政治路線をうち出し」たが、「国民大衆は『革新の大義』に……飛びつこうとはしないのである。なぜか、ずばりいってそれは現在の国民多数の共感を得ていないからに他ならない。『不況下の安定』という言葉が生まれた。……大多数の国民が、いま求めているのは、現実の上になつての漸進的な改革であり、急激な変革ではない」（同、五頁）

こうして、彼らは社会党は「中道派まきこみから出発すべき」（同、五頁）であり、安保廃棄を「入口論ではなく出口の問題」と「位置づけ」よと主張するのである。

中国派諸君の金科玉条は「反覇権主義」である。「反覇権」とは、アメリカ、日本等の帝国主義と共同して、ソ連をうつとの考え方である。そこで彼らはどうしても、社会党の基本的路線である「反安保」の旗をおろし、永遠のかなたに放りなげてしまわなければならない。『しんろ』のこのたびの主張は、そうした動きが開始されたことを明らかにするものだ。

しかも、こうした社会党の基本路線の転換が、『中期経済政策』に依拠しはかられていることに最大の関心が注がなければならない。

「内政については、資本主義のワク内から出発して自主管理の社会主義をめざす経済政策が、すでに同党の『中期経済政策』としてうち出されている。この点で、中道派と入口で、根本的に相対立するものはないはずである」（同）

さらに同誌は「いまや、かつてのように、自民党にたいする批判や不満が、自動的に社会党……にはねかえる政治構造はみられず」といっているが、これは社会党員や同党支持者の努力を否定するものであろう。

## ◇座談会◇

## 宮川陸男氏を偲ぶ

(出席者) 向坂逸郎 (元九大教授)  
 塚元敦義 (元三池労組書記長)  
 灰原茂雄 (元三池労組書記長)

一九七九年三月一七日、三池労組元組合長・宮川陸男氏がなくなった。宮川氏は一九五三年阿具根登(現社会党副委員長)氏のあとをついで組合長に就任。「英雄なき一三日の闘い」(一九五三年)、「安保・三池」闘争(一九六〇年)、CO闘争(一九六三年以降)を指導。一九七一年、定年で辞任されるまで一八年間、三池労組の先頭に立たれた。その後、労働大学講師として労働者教育に全力ををつくされていた。

宮川氏と生涯、生活とたたかいをともにされ、宮川氏をもっともよく知る向坂逸郎(元九大教授)、塚元敦義(元三池労組本所支部長・三池労組書記長)、灰原茂雄(元三池労組書記長)の三氏にお集まりいただき、宮川氏のこと、三池のたたかいのことなどを語っていただいた。こうした企画こそ宮川氏を偲ぶ最善の方法と考えたからである。ご出席いただいた三氏に心からの謝意を表したい。(編集部)

## 三池らしい組合葬だった

滝野 三池労組の元組合長・宮川陸男氏が三月一七日、なくなりました。宮川氏のあの闘争的で、しかも温厚な顔を私たちは再び見ることができません。とくに最近、三池闘争の見直しを唱え、反合理化闘争を実質的に否定する流れが強まっているだけに、宮川氏がなくなられたことは、本当に残念に思います。宮川氏の意志を引き継ぐことは、三池のような組合を全国の職場につくることだと考えているのですが、今日、宮川氏をもっともよく知っていらっしゃる向坂先生、塚元さん、灰原さんから、宮川氏のこと、三池のたたかいのことなどを語り合っていたきたいと思います。

向坂 成田(知己・社会党前委員長)君といい、宮川さんといい惜しい人がなくなって本当に残念です。塚元君、灰原君から語っていただくといい。(三月)二五日の組合葬に出られたのでしょうか。

灰原 荒尾公会堂(福岡県荒尾市)でした。一千人以上の人が集まり、三池労組らしい組合葬でした。弔電も多かったですよ。ソビエト炭鉱労働組合中央委員会から寄せられたのははじめ、海外からのもの五通をふくめ、四五九通に達したとのこと。やはりたいたいのものです。三池闘争をたたかった精神は生き続けているし、さらに広がっているという事ですからね。

総評の代表として内山(光雄)副議長がこられましたし、社会党からは阿具根(登)副委員長がこられました。

壇上には、菊の花でつくられたこの部屋くらいの大きな鉄カブト、それに黄色の菊の花で（三池労組の）三本線（註、団結・抵抗・統一）がまかれ、その上に宮川さんの遺影が置かれていました。くり返すようですが、素朴ななかにも三池の労組員や主婦会員が久しぶりに三池闘争を憶い出す、そういう集会でした。

向坂（組合葬に出席できなかったことが本当に残念だとの表情で）そうですか。

灰原 私は「社会主義協会代表・向坂逸郎」の弔辞を革新・民主団体総体を代表して（笑）読ませてもらいました。先生の弔辞をみんな喜んでくれました。

新聞は、意外なほどに宮川さんの死を大きく報じていましたね<sup>エ</sup>。

向坂 それほど三池のたたかいが大きかったということですか。みなさんも、みなさんを支援した労働者階級も本当によくたたかった。

三池労組の主婦会の婦人たちが、大会会場から目を泣きはらして出てきた大会があったでしょう。あれはいつでしたか。

灰原（一九六〇年）九月六日の炭労大会最終日です。

向坂 それでよく猛烈に怒ったんだ。「君らはなんで泣くんさい、これからたたかおうという人間がなんで泣くんさい」と、怒ったんだ（笑）。

そのときぼくの横に朝日の記者がいて、「泣いちゃいけませんか。これだけ負ければ、たたかう方法は資本家からことごとく奪われてしまう他ないでしょう」というんだ。それでぼくはいったんだ。「安心しろ、資本家がちゃんとたたかおう場所を作ってくれるから安心しろ」とね。こんにちちゃんとそうなってるでしょう。

灰原 三池闘争の意味を再度認識させられて、ビックリしたようですね。首を切られたり、定年でやめた組合員が全国に散らばりたたかっているでしょう。そうした人びとが多ぜい帰ってきて「灰原さん元気でよかったですね」と、いつてくれるんです。そして「やっぱり三池はたいしたもんですね」と喜んでいました。

代表五人が弔辞を読んでいるあいだみな泣いていました、すすり泣きですね。三池主婦会事務局長の平川さんが主婦会の弔辞を代読しましたが、ひじょうによかったですよ。

向坂 会長の島さんはどうしたのですか。

灰原（身体の）具合が悪いということでした。

向坂 ぼくも出れなくて本当に残念だ。もうちょっとで、とんでゆけるのにね<sup>エ</sup>（笑）。

三池のたたかいを指導した組合長らしい、いい組合葬だったということですね。

灰原 そうです。

### 宮川さんを先頭に無我夢中でたたかった

私、その時あらためて思ったんですが「去るも地獄、残るも地獄」、これは三池闘争の闘争スローガンですね。このスローガンは、「クビを切られて去っていく人もたいへんだし、残る者もたいへんだからおたがいに団結して最後までたたかおう」ということだったんです。（闘争の）最後の段階で総評、炭労が「どうしてもこれまでだ」、先生もそういうことをいわれて、闘争を収拾しました。

ぼくらは三三日えんえんとストライキでたたかって、久保清君が殺されたり、安保と

結合して二万人の部隊でピケをはってたたかったでしょう。だから、総資本対総労働のすごいたたかいはやったあとと回収のときになって、「あの人も指名解雇をうけていたのか、あいつもそうだったのか」ということだったんですよ。これがぼくらの実感ですが、「人のために指名解雇に反対する、指名解雇された者を助けるんだ」という気持はなかった。無我夢中で宮川さんを先頭にたたかっていた。ですから、「去るも地獄、残るも地獄」というのは、まさに階級闘争のスローガンだな。三池のようなたかいでなければでないスローガンだと思ってるんです。

今、あちこちで労働者がこんなにクビを切られ、三池以外の指名解雇まで出され、一千万にちかい失業者、半失業者、不安定失業者がいるわけでしょう。他方、資本家は減量経営を達成して黒字を各社が発表している。「去るも地獄、残るも地獄」のスローガンが一八年ぶりに社青同や社会主義協会のみじめな活動家たちからだされています。有事立法もしかけれながら、まだ安保・三池のようなたたかいはおきていない。社会党・総評が先頭に立ったたたかいが、あの時できたのに今できないのはなぜかを、組合葬に列席しながらあらためて考えさせられました。社青同、社会主義協会ががんばらねばならないゆえんでしょうね。

向坂 三池労組には社青同はきていましたか。

灰原 副委員長の大津留（宏）さんがきていました。弔辞はしぼられましたから読みませんでした。労働大学からも「三池にまなぶ会」などで関係のふかい増田（豊）さんがきてました。

向坂 三池闘争は社会主義協会、社青同、労大ぬきには考えられません。共産党はあんまり三池闘争を評価しなかったな。

灰原 （共産党は）きていたのかもしれませんが。社会主義協会九州支局からは小島（恒久）先生らがおみえでした。

先生が通院していらっしやらなければ、まっさきに行かれたんでしょうがね（笑）。

向坂 くやしうってしようがないんだ（笑）。

灰原 何人もの人が「向坂先生お元気ですか」ときいてましたよ。

向坂 いや、これからまだやるよ（笑）。

「やるだけやった」自信がホッパー大学を生んだ

向坂 学習会をやったでしょう。あれは三池闘争が終わってからです。

塚元 ホッパー大学ですか。

向坂 そうです。

灰原 政府介入で中労委のあっせんに入ってからです。六〇年七月の暑いさかりですよ。他の争議にはこんな例はぜんぜんないでしょう。まけいくさになってから、たしか五〇人でしたね。塚元さん。

塚元 そう

灰原 五〇人ずつ五日間、五期までやりましたね。

塚元 そうそう。

灰原 あの闘争の最中に、しかも決戦も抑えられ中労委のあっせん開始、ストライキ継続でしょう。「どうなるかわからんぞ」という時に（ホッパー大学は）はじまった。それだけに、ホッパー大学のことはみんながおぼえてますよ。

向坂 そうだろうね。よくたたかい、勉強したからな。ホッパー大学は三池でしかできません。宮川さんやあなたたちが考え実行されたんでしょうが。

塚元 どういうことかというところ「大敗北ではあったけれど、よくたたかった」、これですよ。

向坂 そうだな。それでなくてもホッパー大学の講師を引き受けたんだ。

塚元 「やるだけやったんだ」、これがホッパー大学を受ける体制になったですよ。

向坂 三池労組は「なにをなすべきか」をすぐ考えはじめたということです。

塚元 みんな熱心でしたね。

向坂 一生懸命だった。学究も病軀をおして参加してた。それほど熱心だった。

### 加茂君の功績は偉大だ

灰原 ホッパー大学、ホッパー小屋のことでいえば、加茂（甫・現鳥取大学教授）先生が看護婦さんをつれてよく巡回されましたね。

塚元 そうそう。ホッパー小屋が二十カ所あった。ビニール小屋ですよ。看護婦さんをつれて陣中を見回ってた。消毒、消毒ってね（笑）。

灰原 これは先生、先生が衛生状態を心配してのことだったんですよ。常時二万人くらいの方がいましたからね。

塚元 それでみんな真剣に、ハエ一匹とまっても殺せ、生水を飲むな、立ちしょんべんはいかん、などとやった（笑）。

向坂 ハエの世話からしょんべんの世話までね（笑）。三池闘争のなかで伝染病が出なかったのは加茂君の功績だよ。

灰原 チブスなどの伝染病がおきたら、即日「ビケ隊解散」になってしまふ。大牟田に以前チブスが発生し、多くの人が死んだ。それを先生おぼえておられたんですよ。しかも夏の盛りだったですからね。

向坂 そうです。だけど加茂君が驚いてたな。調理室があったでしょう。前の方はハエよけのおおいがかかっている。ところが後の方はかかっていない。ハエは後の方からもきますよ（笑）というんだ。そういつて笑っていた（笑）。

灰原 とにかく、ホッパー大学のようすをふくめて三池は映画にしなきゃいけませんよ。本当のことは三池の労働者でなければわからないんです。塚元さんとも話しをしているんですが、みんなで自主的に金を出し合っただけで三池闘争という壮大な映画をつくる、やってみたいですね。

### 『資本論』をよくやった

向坂 本所支部で『資本論』をやったでしょう。あれはいつですか。

塚元 三池闘争のずっと前です。

向坂 『資本論』をよくやったな

塚元 「よくやった」のはこちらじゃない、先生こそよくやられましたなア（笑）。

灰原 そうですよ（笑）。

塚元 つづいたのは先生が熱心だったからです。先生がおみえにならなければ、あんなにつづかんですよ（笑）。結局、先生が完全にひっぱられたというかこうですね（笑）。

灰原 『資本論』学習会は昭和二十八年の「英雄なき一三日の闘い」のあと――

塚元 二八年の後半から三〇年、三一年とつづいた。

灰原 三池労組の上り坂ですね。

向坂 上り坂の三池は実際、愉快だったな。

塚元 楽しいですね。

向坂 そのうち日本の労働者はああなるよ。たたかう場所を資本がつくってくれているんだから。

灰原 ぼくらだってあれだけやれたのに、よそでどうしてやれないのか、不思議です。

向坂 かならずたたかわざるをえなくなるよ。ちっとも心配ない。

### 宮川さんは『資本論』の教えることを知っていた

塚元 来月三池にちょっと帰りますから、宮川さんの奥さんの生活をどうするのか、聞いてみる予定です。

向坂 われわれの力で考えることが必要だな。宮川君は本当に一生懸命だった。

塚元 ぼくは宮川さんと二十三年くらいいっしょにつき合っておった。彼の憶い出はいろいろあるんですが、一つ感心していることは、彼は自分の意見とはちがっても、あらゆる人の意見をよく聞く人でしたな。

向坂 宮川さんは信州の人ですか。

塚元 そうです。宮川さんのいい点としては、幅広い彼にたいする支持層、これが彼を支えたということじゃないでしょうか。そこが彼が三池を継続して指導できたところもあるんじゃないかね。

灰原 組合長として、一八年間ものあいだね。

塚元 彼はタバコをたくさん吸う人間でしたが、ずっとゴールデンバット、これいちばん安いタバコなんです。昔、「兵隊タバコ」といってたものなんです。これをこんなにまでずっと吸っていた。もう製造停止じゃないのかな。

「なんでそれを吸うのか」ときいたら、「いちばん安いですからねエ。ワシはこれ吸いつけとるから」というんです。このことひとつでもわかるように宮川さんはかざらない人間です。

灰原 そうでしたなエ。

塚元 去年の十一月、「三池にまなぶ会」で行った時、彼はちょうど入院してたもんだから、労大のみなさんといっしょに見舞いに行った。ガンの疑いがあるからと、医者が検査しよったわけですよ。医者もタバコを吸うなといったらしいんですがね。それで行ってから「タバコをやめたかね」といったら、「いや少なくて。五本、五本のんだ」と

(笑)。やめてなかったですね。(笑)。ほんとうに好きだった。彼はかざらない人間という感じですよ。

灰原 私は昭和三三年に三鉱連から三池に帰って、宮川さんや塚元さんたちにいわれてすぐ三池の書記長になりました。昭和三三年から三池闘争を経て炭労事務局長になる昭和四〇年の秋まで、約八年ばかり宮川さんとは組合長、書記長のあいだからです。とやってきたんですけど、宮川さんの人となりは塚元さんがいわれたとおりです。

宮川さんが人を大きな声でどなったり、ひやかしたり、怒ったり、馬鹿にするような態度をとったことはないですね。これはやっぱりえらいですよ。鋭い中に謙虚さがありましたね。

向坂 信州人らしいな。宮川さんが組合長になったのはいつですか。

灰原 昭和二八年です。

向坂 三池労組が日本でももっとも強力な組合に発展していった時期ですね。

灰原 例の「英雄なき一三日の闘い」で「ねむれるブタ」からかっかっかと三池が上り坂になった輝かしい時代からの組合長です。

向坂 獅子になった三池の、宮川さんは先頭に立たれたわけですね。

灰原 「一三日」後の職場闘争、学習活動、生活革命闘争の活動・組織の三本柱は、宮川さんぬきには考えられません。その生涯が三池労働運動史そのものでした。

他の人ならもう少しえびりますよ。三池労組のもっとも輝かしい時代のおられたし、他にも、私のあと書記長をやった塚元さんその他みんながいたですから、いばるにもいばれなかったんじゃないかとも思います。それにしてもりっぱでしたよ。人を馬鹿にしたりするそぶりをみせたことがなかったですね。

塚元 宮川さんはすばらしい指導者ですよ。

向坂 宮川さんは近年になって『資本論』研究に努め、率先して有志の人びとと早朝学習会をつづけられた。これは、若い人たちがぜひ見習ってほしい点です。とくに宮川さんがえらかったのは、労働組合の組合長であっただけでなく、社会主義者として大成されたことです。

灰原 『資本論』の教えることを知っておられたですね。

向坂 それだけに宮川さんが早く亡くなられたことは、本当に残念で悲しいことだ。

たたかいが人をつくる

灰原 いま全電通労組にとくに顕著にあらわれていますが、形式的に上で決めたことでもって下を抑えるんですね。三池の経験でいうと、これは三池の伝統といえるんでしょうが、学習でちゃんとした理屈、理論をいさる力を労働組合もたなきゃならんということですね。

塚元 三池闘争直後にも「とびさがり論」といいますか、「あまり抵抗しすぎるからたたかれるんだ、だからさがれ」「くそのついた千円札も千円札だ」と馬鹿なことがいわれた三池は、そのなかでホッパー大学、五人組を組織し、「長期抵抗路線」をつくり上げてき



た。これはやはり学習会、「やるだけやったんだ」との自信からできたんでしょね。「かたんにカブトをぬげるか」とね、これでしょね。

向坂 その精神、たたかう精神は残ってたな。

灰原 いま塚元さんがいわれたことを私も先生から学んできたつもりですけども、実際に運動を、実践をしなければわからないことがいっぱいあるんですね。労働者が団結すると言葉でいっても、いいかげんなことで妥協ばかりしては団結にならないですよ。

向坂 ええそうです。

灰原 みんなが幹部を信頼して幹部までふくめてたたかうか、たたかわないのかは、大きなちがいです。今問題なのは、家族までふくめてたたかかっていないことなんです。これからでしょうけれども、そういう意味でいいますと、実践をふくめて、背後には理屈・理論がなくてはいけません、現在はたたかかっていないですよ。途中でやめている。

塚元 それはたたかかった経験がなければわからんな。ということは、先生はおわかりにならないと思うだろうけれど、酒飲みがいっしょに酒を飲むことは、これ相当おたがいに信頼が深まるんですよ(笑)。いっしょに酒を飲んだというわずかの行動でも連帯感をもちうるんですよ(笑)。酒飲み連帯感ですがね(爆笑)。

ましてや三井という大独占を相手にして一年間いっしょに同一目標にむかって同一行動したわけですから、すばらしい信頼と連帯感ができないことはないんです。

向坂 ぼくはその時、塚元君と議論したんだ。よっぱらいの信頼感だと(笑)。

塚元 ですから、団結という言葉を経々しく口にだすより、共同行動というか、いっしょにやる、そのなかからの喜び——それが団結だと思っただが——は、やってみなければわからんと思うんですよ。頭のなかだけで考えていてもわからん。どんなに本を読んでもわからんと思うんだ。そういうものが大衆のなかに、行動、たたかいをとおしてできあがる。これがすばらしいことだと思っ。あんまり理屈だけいうなことじゃありませんよ。向坂 ええそうです。理屈のお説教でなくたたかいが人をつくるということです。三池の労働者と社会主義協会の学究は、三池闘争のなかで完全に融合しましたね。それはいっしょに学び、たたかったからです。だから、われわれも三池労組とその主婦会とをよそごとと思わなくなっし、三池のみなさんもわれわれをどこかよその学者と思わないで、自分たちのもっとも親しい仲間と考えてくださっただんでしょからね。

### 活動家はたたかうことよって楽しくなる

灰原 ぼくらの経験ではたたかって、実践した時はじめて理屈が正しいということがわかるんです。理屈のとおりやるたたかいはないですね。知らず知らずのうちに、理論的に法則どおりの運動をやっているでしょうけども。しかし実際たたかってみて、独占資本だとか搾取だとか階級闘争が身体でわかる。読んでいるだけではだめですね。たたかって「理屈が本当だった」という感じですよ。

塚元 実践をやって(本を)読んでみて「正しかった、正しかった」といくら感じて、正しいとかなんとかいうことは、ひじょうにあいまいだと思っ。いわば理論と実践を結合して「正しい」と感じる場合、自分のなかに喜びとして感じるかどうかだ。だから「正しい」と

いうことは実際、ひじょうにあいまいでおかしいよ。自分の喜びになるかどうかということだ。

向坂 ぼくほど楽しい、喜びの多い者はないと思うよ(笑)。

塚元 喜びを感じることが「正しい」かどうかの証明じゃないかと思う。

灰原 自信ですよ。

塚元 だから、言葉というのはじつにあやふやだと近頃思い出した。

灰原 全電通労組は社会主義協会や社青同を敵だといって、若い人たちが役員をやめさせられたり、処分をおしつけたりしている。だけど、全電通で社青同や社会主義協会に属している人は、だんだんりっぱになっている。マルクス・レーニン主義の理論でたかうことに喜びを感じているんですよ。なんにも悪いことはしていない。幹部の方針がまちがいなら、「まちがいだ」といっている。それをむちゃくちゃに排除するわけでしょ。だけどこういうたたかいのなかで、全電通に何百、何千という活動家が増えてきたと思いますよ。りっぱな人が育っている。

塚元 そうなんだ。みんなが一生懸命やって「よろしい」とか「楽しい」とか感じてるわけだ。それを「やるな」というわけだからね。「楽しい」と思っているやつを「やるな」というんだから、怒るのはあたりまえですよ(笑)。「楽しさ」を感じていなければ「やるな」といえば、「ああそうですか」ということになるが、活動をやって喜びを感じているものに「それはまちがいだからやるな」といえば、自分が喜びを感じているのに「まちがいだ」といわれれば誰だって怒るよ。まずまず反発すると思うんだ。

だから独占とかそれにくっついたようなダラ幹が、労働者にそういうことをいえばいいほどちゃんとした労働者をつくってくれてくれる、こう思っとるよ。ダラ幹はそこがわかっていないからぼくはバカだと思うな、ふぬけだと思う。

向坂 活動家はたたかうことが楽しくなるが、彼らはそうならんのかな。

塚元 そうです。そうです。たたかって「楽しい」と思ってる人に「やめる」いうんだから、怒りますよ(笑)。

灰原 「やめる」というときの立場も、いっしょに苦勞して、いっしょに学習して、本当に論議していっしょに心配しながら、そして「このへんでやる」「総括をして次の段階に備えよう」「敗北に学ぼう」と、大衆が喜んでるのをいっしょになってたたかいながら指導するならいいんですけれど、そばで見とって「やめる」とか、喜んでたたかおうとしているのをいきなり「やめる」とか、そういう人はマルクス・レーニン主義者じゃないと思う。そういう人は多いですよ。

塚元 いっしょにやっとなるならねえ、やめるとはいわんよ。

向坂 そうです。

灰原 実際そうですねえ。

塚元 言葉でいえば、立場がちがうからくいちがってくるわけだ。

灰原 そのへんがね。

塚元 だからいっしょにやっておって「やめる」というのは意味がわかるんだ。しかし、いっしょにやっていないのに、「やめる」というから反発するわけだ。

向坂 三池は不断の学習と闘争の経験から学んだということだな。だから、われわれもこの三〇年の学習と、これを成長の糧としたたかった経験の蓄積から学び、これをおのおの組織の闘争に生かすことだ。片時も未来をつくる歴史的使命を忘れないことです。それが宮川さんの遺志をつくぐことです。

## ◇資料と解説◇

## 「原子力計画はただちに中止せよ」

— 米・原発事故で社会党が「申し入れ」 —

われわれは社会党の『中期経済政策』について、「『原子力の見直し』でも大衆闘争が無視」と、次のように述べた。

「大衆闘争の無視は、他のいたるところに現れている。たとえば『原子力の見なおし』という項がおかれ、『原子力については、平和利用に限り、自由、民主、公開の原則のもとに安全性が確保されるのであれば認めるのが基本的方針である』、『当面原子力は研究段階と位置づけ、他の炉型を含め、安全性、信頼性を中心に研究開発を促進し三〇五年を目標に実用化の見きわめを行なう』とされている。

党は一九七二年一月の第三五回定期大会において、『安全性と三原則の実行をとまわない独占資本による原子力発電と再処理工場の建設に反対するたたかいを、全国二十余カ所の地域反対運動と連帯し、勤労国民を結集し、さらには各級議会、国会でのたたかいを有機的に強化することによって、全党的課題としてとり組むものである』と決議している。それにもとづいて、もっとも新しい政策である七七年の参議院選挙政策においても、『原子力発電所及び再処理工場の計画、建設、試運転、運転を中止させ、研究段階にあるものとして位置づける』と決められている。

ところが今や、独占資本とその自民党政府のもとでも『自主、民主、公開の原則のもとに安全性が確保される』かのようである。『三〇五年』で、使用済み核燃料の再処理も、放射性廃棄物の最終処分も、『安全性、信頼性』において解決し、『実用化の見きわめ』が可能になるかのようである。しかも、社会党が『参加』して独占資本・自民党政府とともに、『見きわめを行なう』というのである。有事立法をうかがい、『核武装は憲法違反ではない』と主張し始めた自民党政府に、ブルトニウムの軍事利用などはないかのようなのである。こんな方針では大衆闘争は弱められるしかない。

アメリカのスリーマイル島原子力発電所の事故は、社会党の従来の考え方が正しいことをしめしている。こうした事実によって、原子力の「見なおし」を指唆した。『中期経済政策』は、その権威をいちじるしくこねているといわれなければならないであろう。

この「事故」に関連して、社会党は「日本の原子力利用について再検討すべきだ」と、金子科学技術庁長官に、四項目の申し入れをおこなった。その内容は①原子力発電所は運転も建設も中止して根本的に再検討する②「原子力利用長期計画」は中止して、石油、石炭などの有効利用と太陽熱、地熱などを活用する研究開発に力を入れる③今日の事故の詳細もわからないうちに「日本では起こり得ない」などと述べた吹田原子力安全委員長は即時免職されるべきだ④今回の事故についてはもとより、すべての資料を国民の前に公開する等、である。以下、「申し入れ」の全文を資料として掲載しておきたい。

◇資料◇  
「米・原発事故についての「申し入れ」」

アメリカのスリーマイル島原子力発電所の事故の経過を、われわれは注意深くみまってきたが、事態は予想以上に深刻に進展している（起りうる最悪の事故ではないが）。原

子炉内から冷却材が失われて、燃料棒が破損し、大量の放射能（死の灰）が放出される事故が起りうることは、かねてからわれわれの指摘してきたところであるが、日本の政府・原子力委員会・電力会社は、そのような事故は起りえないものであると主張し、大型炉の無謀な建設を推進してきた。

今度の事故は、われわれの洞察の正しさと、自民党政府・原子力委員会・電力会社の楽観論の誤りとを完膚なきまでに証明した。楽観論の根拠となっていた「ラスマッセン報告」も、「安全装置の神話」も崩れ去った。

「設計した会社がちがうから、日本の加圧水型は大丈夫である」とか、「沸騰水型は大丈夫である」などという詭弁は許されない。異なる会社でも設計の基本は全く同じであり、機器に大差はない。沸騰水型においては、炉本体や冷却水供給パイプ等に、ヒビ割れが知らぬまに発生し成長しており、加圧水型の二次冷却水が停止することによる今度の事故よりも、むしろもっと直接的に短時間で炉内の冷却水が失なわれるような事故の恐れすらある。いかに耐震設計をしようとも、ヒビ割れが生じているのは、大地震の時などにスリーマイル島より一層重大な事故を生じかねない。しかも、日本の立地は、いずれも大地震の発生しうる場所であるだけでなく、都市に隣接しており、ひとたび大きな事故が起れば、ガンの発生率や異常児の出生率を大幅に高めずにおかない。その上、食品の多くを水産物によっているために、海岸の原子炉から格納容器等へもれ出した放射能は、仮に幸運にも大気中への飛散を比較的少なくおさえることができた場合でも、永年にわたって、海を水俣よりも深刻に汚染せずにはすまないであろう。大量に炉外へもれ出した死の灰は、近づいて安全に回収し処理することさえ不可能である。百万キロワット規模の原子力発電所を一年間稼働させれば、広島に投ぜられた原爆の一千倍もの死の灰を炉内につくり出している。その十%といわず一%でも炉外に放出されるとき、どれほど深刻な事態を招くかは論を持たない。

したがって第一に、「現在の原子力技術は、研究室・実験室を一步も外へ出てはならない段階であって、日本で発電所や船に利用してよい段階ではない」というわれわれのかねてからの主張の正しさが、あらためて証明された今日、原子力発電所は運転も建設も中止して根本的な再検討を実施するべきである。原子力船「むつ」も原子炉をとり外して、船体は別の活用をはかり、陸上の研究室における必要な研究からやり直すべきである。

第二に、当面日本ではこのように危険性が大きいだけでなく、きわめて不安定である原子力に、発電の多くを依存することとなるような「原子力利用長期計画」は中止して、石油・石炭・ガスのより有効な利用と、太陽熱・地熱・波力・風力・オイルサンド等の経済的な活用方法の研究開発に力を入れるべきである。

第三に、今日まで、原子力委員会や原子炉安全専門審査会や原子力安全委員会はきわめて安易で無責任な態度をとりつづけてきたが、このような事故は起りえないとしてきた従来からの委員や、今度の事故の詳細もわからぬうちに、「日本では起り得ぬ」などと述べた吹田徳雄・安全委員長姿勢は許されるものではない。そのような委員や吹田委員長は即時免職されるべきである。

第四に、今日まで政府・原子力委員会・電力会社は知り得た資料の重要な部分を公表し

ないのが常であった。われわれは関係各県の代表者も含めて社会党独自の調査団を現地に派遣することも検討しているが、今度の事故についての資料はもとより、すべての資料は国民の前に公開するべきである。

以上の諸点をわれわれは強く申し入れるとともに、スリーマイル島附近の妊婦や小児だけでなく、発電所の労働者や汚染の恐れのある地域の人々の生命と健康が守られるよう必要な措置がとられることを切望するものである。

一九七九年四月三日

日本社会党中央執行委員長

飛鳥田 一雄

内閣総理大臣 大平 正芳 殿

### ◇読者からのたより◇

はじめにお便りします。早いもので「社会通信」を購読して一年がすぎました。今日の情勢をとらえる上で本当に勉強になり確信をもつことができます。

私も全通労働者ですが、年末にたたかった反マル生のたたかいで多くの教訓点を得ると同時に、このたたかいが独占資本の四〇〇万人首切りに抗するたたかいであり、われわれの路線を組合員大衆が解認しあったたたかいであったと、同志・諸先輩の問題提起や、教訓点が出されるたびに、自分たちのやってきたことの反省とこれからの長期闘争で何ごとわれているのか明らかにできています。

私たちの職場は、七四年の暴力事件デッチ上げに抗して、同志とシンパ二人ではじめた日刊（「闘いの道しるべ」）ニュースの発行から運動らしいめざめができてきました。

正常作業のたたかい（バイクの両手運転）、右ホーンバイク乗車拒否のたたかい、欠損金、正しい募集というような、いのちと権利を守るたたかいが提起され、当局につぶされ、つぶされ、今はまったく少数派になっていますが、その思想は職場の底に流れているといえます。

この間当局は、数年間にわたる組織切りくずしを着実に進めてきました。とくに社青同員を徹底的にマークしながら——管理体制の強化、役付組合員の徹底した教育、官制サークルの育成強化、局内人事を活用した部下職員づくり、最後の仕上げとしての一五名（組合員八五名）の脱退工作がしくまれたのが、反マル生闘争最中の一二月でした。

この五年間にわたる当局の組織論（？）をわれわれとしてもまなぶ必要があるとまず考えました。

二点目は、われわれの組織づくりが、当局の攻撃に左右され、とくに「協会」「協会」の攻撃があらわれた時、職場でも当局がたくみに利用し役員間に入りこんでいたことです。現在、二ヶ月間のたたかいの反省に立ち、五人組体制の再編成と、学習会づくりに着手しなおしたところです。

### ◇本誌拡大のおねがい◇

▽『社会通信』は現在、月額三〇〇円でみなさんのお手元に送本しております。したがって、紙数をこれ以上ふやすことは容易ではありません。他方、私たちをめぐる情勢は、帝国内主義諸列強の地位の低下とともに、はげしく動いています。すべての分野において、さらに内容を充実させるためにも、ぜひまわりの仲間におすすめ、もっともっと購読者をふやしていただきたいと思えます。

▽見本誌ご希望の方は、その旨、編集部までお申し込みください。

## マル生・八万人合理化の嵐に抗して

岩 井 章

国鉄当局の労務管理が、今、急速に変わろうとしている。再びマル生攻撃と、八万人合理化が始まろうとしている。どうやらその準備は完了したらしい。

次の文章は、ある鉄道管理局長と総務部長の昨年五三・一〇ダイヤ改正後書かれた随筆の一部である。

「今回のダイヤ改正は大幅な列車削減を伴ったという点で歴史的といえるものですが、これほど大きな合理化を含んだ改正作業が予想された程のストライキもなく、異例と思われる程スムーズに実施できたということにも従来にない意義があったと思います。それは一面ではこのダイヤ改正の意義が管理者の間で充分に理解されていたために本社から現場に至るまですき間のない意志で統一されていたということもありましたが、むしろ私はみのがせない要素として労働組合に於て国鉄経営に対する危機感がつよまりいたずらに労使対立している時ではないという理解が広まってきたことを重視すべきだと考えます。」

「この点について高木総裁は一〇月二〇日の全国労務局長会議の席上、『今回のダイヤ改正を通じて当局、組合双方に同じ沈みつつある船にのっているのだという意識が生まれできたことは大きな収穫だった』と述べられたが、その共通の危機意識は上部の理解にとどめず現場の労使関係に於いても同じことが言えるようにしたいと思います。」

「管理者が一致団結すれば相当のことができるという自信がついたことは大きい。職場にあるべき姿に近づけるべく『守り』から『攻め』の姿勢へ転換していきたいと思う。現に五三・一〇を機会に今まで管理者がやらざるを得なかった清掃作業を本来の姿に戻した現場長もいる。」

以下続くのであるが、ここまで読んでくれば国鉄当局の肚の内がよく判るだろう。企業意識の中に労働者を取り込むことに全力をあげている姿がいじらしい程明確になっている。

歴史的にみて一九七二年のマル生以後どんなふうなふうに労務管理は変化したか。「不当労働行為をしたことは誠に申し訳ありません」と磯崎総裁が国会で深々と頭を下げて以後、職場は荒廃し、国鉄当局はひたすら低姿勢の労務管理であった。いわば一切の命令とか圧力とかを現場では用いず、労務管理の方法に苦心してきた時期であった。

そして一面では中央、地方の各組合機関との関係を正常化するために最大限の努力を払った時期でもあった。

前述の随筆に出されるように現場長がほうきをもって駅舎を掃除するといったこともあったに違いない。それが今、大きく変わろうとしているのである。彼ら中間管理職が「守りから攻め」に移ると言っているのである。なぜそんな自信が生まれたのか。その「攻め」とは何か。

### 国鉄経営について

まず高木総裁が言う「沈みいく船にのっている者同士という意識が生まれた」というこ

とについて考えてみる。たしかに国鉄経営はかなり危機である。沈みつつあるとは思わな  
いが、かなり苦闘しているのは事実だろう。しかしその危機とは何か。その認識が私とは  
全く違っている。

高木氏の言う危機とは、年間八〇〇億円から九〇〇億円になる「赤字」をさして言  
っているであろう。しかし私の言う危機とはそれと違う。私の言うのは、「国民から見  
放されつつある国鉄」という意味である。しかも運輸省、国鉄当局はその「赤字」を解  
消するためひたすら利用者と労働者に犠牲を押しつけようとする。運賃を更にあげ、労働者の  
首きり、定員減、労働強化を押し進めようと懸命である。このようなあり方は資本主義的  
利潤本位の経営方針であり、独占資本の論理、つまり受益者負担の原則というものである。

しかもなおかつ重大な矛盾をつみ重ねていく。一方で「赤字」解消を言いつつ、その  
「赤字」路線をつぎつぎと作っていかざるを得ない。これからつくられる新幹線はすべて  
「赤字」となることはきわめて明白でありながら、それを拒否することはできない。五〇  
〇〇キロのローカル線をきり捨てると言いつつ、新規の「赤字」ローカル線は国会から次  
々と押しつけられてくる。この矛盾をどう説明するのか、是非聞きたいものである。

私はこの資本主義的利潤追求の経営で問題が解決するとは思わない。

私の意見は、国鉄をより社会化する経営以外に解決できないと思う。

まず経営の根幹である経営委員会を利用者、労働者、政府・国鉄代表者の三者の完全な  
平等制に改めることを求めたい。この三者構成の経営委員会は各地域ごとに同様な組織を  
作って諮問する機関とする。そして経営の根本方針は国民の足をいかにして確保するか。  
そこに重点をおいてすべての基本を打ちたてる。通勤、通学を考え、国民の旅行需要、  
貨物輸送に應えるようにすべきである。これには幹線もローカルもないし、中央、地方の  
区別はない。赤字だ、破産だと言いながら一日一四億円という金利はまさに確実に銀行へ  
返済していく。そして運賃値上げを次々とすすめる結果、更に利用者は離れていく。一方  
労働者には人並みの賃金、手当さえ払うことをけちっていく。これこそが利潤本位の経営  
であり、この道を進めば確実に経営は縮小していく道であり、ついには全く基幹輸送でな  
く部分的輸送機関に転落していく。これは私の言う社会化経営と一八〇度異なる方向であ  
る。私の意見は国民としての積極的経営方策である。完全雇用の道であり、国民の足を確  
保し更に拡大する道である。

数年前の石油ショックは今後おきないとは言えない。その時燃料消費の最も少い輸送と  
して電車輸送は当然最も重視される。安易にモーターゼイションに流されていくことが  
正しい道だとはけっして思えない。私の言う社会化の道を目指せば運賃値上げなど当然の  
こととして行わない。むしろ徹底的に住民サービス、勤労者サービスの方向へ向きを変え  
ねばならない。ところが現実、高木総裁も何とか局長も「組合の側にも危機意識が出てき  
た」という時の意味は、当局の言う経営方向に理解が深まったと評価しているのだが、私  
はそうは思わない。先程もいったように、働くことを拒否するのは国鉄労働者の中には  
いないと思う。少なくとも国労方針ではない。「働く。要求する。闘う」という方針・立  
場を決めたのは、勤労国民との連帯をめざす立場を明らかにしたのである。

## 第一マル生と対決しよう

さてこの総裁の考え方が現場を指揮する局長総務部長の発言に関連してくる。「職場を  
あるべき姿に近づけるべく、守りから攻めの姿勢へ転換していききたいと思う」とはどうい

うことなのか。「職場をあるべき姿に」をはどういうことなのか。その後が続く「今迄は管理者がやらざるを得なかった清掃作業を本来の姿に（労働者にやらせた）戻した」という文章をみると意図するものが見がつく。

私は清掃とかお茶汲みとかを誰がやるかはあまり重要なことではないと思う。本来の仕事が気持ちよくやれる雰囲気や作業環境にあるかどうかが一番大切なことだと思う。労資はあくまで対等であり、契約なくして労働なしの近代的関係が確立されているかどうか。

この部長の言う意味が現場協議で約束された作業手順内容まで否定するものであるなら（今、全国各地で労務監査と称してそれをやっている）絶対反対である。それは明らかに第二のマル生運動へと発展するからである。更に「守り」から「攻め」へと何を意味しているのか。

最近、運輸大臣にかの有名なタカ派森山欽司という人物が座った。彼はまさにその攻めの旗をたかだかと振り回して国鉄当局を叱咤激励しているに違いない。

八千億円の赤字のうち五千億は構造的負担部分であり、三千億は企業的努力による赤字解消部分だと彼は言う。そしてその三千億円は、国鉄労働者一人当たり年収四百万円と計算すれば、丁度八万人の労働者の数に当る。つまり国鉄労働者八万人の数を減らしたい。その提案がこの夏にも組合側に示されるだろう。

国鉄当局中央は、六年前のマル生以後ひたすら国労の中央地方の各機関との間に協調体制を築くことに全力をあげてきたのである。いわば正常化路線である。そのためには現場ではある程度組合側の突出部分にも目をつぶってと考えてきたに違いない。しかしこの段階で、まず中央労働協約より突出した部分をたたくことに力を入れはじめた。そこへ森欽氏からの強い圧力がかりはじめた。

郵政でもやっているのだから国鉄でも力で押せと圧力をかけているのだろう。私はその森欽さんの方針を喜んで迎え撃ちたいと思う。敵が第二マル生をはじめぬなら、それを一致団結して迎え撃ちたいと思う。マル生攻撃がどんなに職場を荒すものであるかは先頃の経験が知っている。だからこそ私達はより広範な勤労国民との連帯を積極的に押し進めねばならない。

国労中央委員会は「誠意、親切運動」を決めたというが、それは連帯強化のことだと思う。それは利潤本位の経営方向でなく、社会化の方向に向かって進むという大前提の上にならなければならない。それは利潤本位の経営方向でなく、社会化の方向に向かって進むという大前提の上にならなければならない。そのために数多くの勤労国民と接触する生産現場を通して、勤労者と連帯する機会を生かすべきだと思う。無論、その前提となるのは職場での強固な団結である。幹部活動家と組合員の団結である。団結とは闘い、抵抗し、学習する中で培われる。その団結を阻害する規律のゆるみは批判されねばならない。国鉄当局者が独占資本の論理で貫徹しようとするかぎり、彼らとも当然闘うことになる。最近の当局の動きをみていると嵐の前ぶれを感じる。準備を急ごう。

敵の狙いは前回のマル生の経験を生かして、中央地方の分裂を狙ってくるだろう。しかし結局は全戦線での闘いに発展するだろう。それを森欽氏は望んでいる。高木氏はじめ当局の諸君も結局それにしがうことになるだろう。繰り返して言う。その準備を各職場、各分会でいそがねばならない。

私達は敵の攻撃を喜んで迎え撃とう。

私達は前回もそうであったように必ず敵をうち破るだろう。（一九七九・三・九）

（『国際労働運動』七九年四月号より転載）